

# 徳丸ジョウジャダ遺跡の玉作り 1

## ～弥生時代のアクセサリー～

徳丸ジョウジャダ遺跡は<sup>やよい</sup>弥生時代後期（今から 1700 年前）の集落遺跡で、玉作りの工房である<sup>たてあな</sup>竪穴建物がみつかっています。ここで作られていた『玉』は主に<sup>くだたま</sup>管玉（細長い円柱形の玉）ですが、1点のみ<sup>まがたま</sup>勾玉がみつかっています。

徳丸ジョウジャダ遺跡で使用する管玉の石材は2種類で、ひとつは石材の9割以上を占める<sup>りよくしよくぎょうかいがん</sup>緑色凝灰岩（緑色～淡緑色の<sup>やわ</sup>軟らかい石）、もうひとつは<sup>てつせきえい</sup>鉄石英（朱色～黄色の<sup>かた</sup>硬い石）です。

竪穴建物からは大小含め2,300点以上の破片がみつかっていますが、石材の原石はなく、他の場所<sup>あらわり</sup>で荒割してから建物内に持ち込まれたようです。玉作りに必要な製作道具もみつかっており、<sup>だいし</sup>台石・<sup>たたきし</sup>敲石・<sup>みがきし</sup>磨石・<sup>といし</sup>砥石などの石製道具や、<sup>たがね</sup>鑿・<sup>のみ</sup>鑿・<sup>やりがんな</sup>鉋などの鉄製道具もみつかっています。

仕上げの<sup>けんま</sup>研磨をした管玉や完成した管玉がみつかってないことから、最終的な仕上げ作業はこの建物とは違う場所で行われたと考えられます。

